

アジア諸国と人権 (その三五)



研究センター所長
京大名誉教授

安藤 仁介

モンゴルに続いて、ヴェトナムの人権状況について考えてみましょう。ヴェトナムは東南アジアの一国で、旧仏領インドシナ3国の一つです。国土面積は33万平方キロと日本よりやや狭く、人口も約九千万人です。細長い国土は、中国と国境を接する北端から南シナ海沿いに一七〇〇キロも広がり、全体としてS字型になっていて、西側ではラオス、カンボディアと隣り合っています。そして、この細長い国土はハノイを中心とする北部、フエ、ダナンを核とする中部、ホーチミン（旧サイゴン）を中核とする南部に、三分されます。

の新石器時代、続いて青銅器時代の遺物が発見されています。しかし、紀元前一二一年、漢の武帝が当時広東に都を置いていた南越王朝を滅ぼし九郡を設置したうち、南部の三郡はほぼ現在のヴェトナムに当たります。その後何度かの土着勢力による反乱や王国の建設も中国の諸王朝の干渉を受けましたが、一〇〇九年になつてはじめてヴェトナム人による比較的長期の安定政権、リ王朝が樹立されました。それ以降もヴェトナムの政権は、内紛に乗じて干渉を繰り返す宋、明、清の勢力に翻弄され続け、今日のヴェトナム国家の骨格が固まるのは、やっと一八〇二年、グエン王朝の成立以後のことです。ただし、清朝後期における西欧列強の中国進出のなか、フランスが一九世紀後半には、まず南部をフランス領コーチシナ、北部をトンキン保護領、中部をアンナン保護国として植民地化したことは、ご承知の通りです。

いずれにせよ長期に及ぶ中国との関係は、その文化がヴェトナムの社会組織、信仰、儀礼、風俗習慣、そして芸術などの各分野にわたって強い影響を与えた事実を意味します。その中でも、法制と官僚支配体制はヴェ

トナムの人口構成をみると、総人口の八割五分はヴェトナム系で占められ、周辺の他部族からはキン人と呼ばれています。また、北部山岳地帯には、水稲耕作に従事するタイ系諸語の少数民族が住んでいるほか、焼畑農耕やケシ栽培などに従事するミャオ族（約25万）、ヤオ族（約20万）などの少数民族も住んでおり、いずれもシナ・チベット系といわれています。これに対して北部山間部に住むムオン族（約40万）はヴェトナム語と同系の言葉を話すと考えられており、中部高原地帯に住むモイ族などモンタニヤールと呼ばれる少数民族（100万を超える）と同様に、焼畑農耕や採集、狩猟などの伝統的な生活様式を維持しているアウストロアジア語系およびアウストロネシア語系の原住民です。かつては、ヴェトナム人の祖先は中国南部から来たと思われていましたが、今日ではむしろこれら原住民が祖先と考えられるようになりました。

中国系住民は全体の3パーセントに過ぎませんが、ヴェトナムの歴史を通して中国の影響はきわめて強いものがありました。この地域では、すでに紀元前八、〇〇〇年エトナム社会形成の中核的な役割を果たしました。また、儒教を思想の基盤とする漢字文化への傾倒は、「士」（官僚）を中心とするバンタン（文人、読書人階層）の台頭をもたらし、彼らは社会の上層部として政治権力を握るとともに知性の代表ともみなされたのです。これと並んで、ヴェトナムの伝統社会では、村落と中央政府が支配従属でなく、対置する関係にあることが注目されます。そのため、村落の維持・運営は、実質的に長老・退職官僚・富裕農民などで構成される「郷職会議」の手に委ねられ、中央権力の介入は形式的なものにとどまりました。つまり、ヴェトナム伝統村落の共同体的性格と集団主義は、長期にわたる中国への服属、フランス植民地支配やインドシナ戦争への抵抗の全期間を通して、ヴェトナム社会の根底にあったわけでは、ともに共産党独裁の政治体制をとる中国が自由

権規約への加入を拒否してきたのに対して、ヴェトナムがなぜ早くから同規約の当事国となっていたのでしょうか。次に、その問題からヴェトナムの人権状況を考察してみましょう。